

令和7年度
研究紀要

小中学校におけるICT活用に関する研究

個別最適な学びと協働的な学び×ICT活用

令和8年1月

盛岡市教育研究所

<研究の概要>

G I G Aスクール構想は、学習指導要領のカリキュラム・マネジメントにおける、物的な体制整備に位置付けられ、全国の小中学校で一人一台端末が整備されることが教育の機会均等の実現を支える資源となった。これにより、児童生徒一人一人に確実に資質・能力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や、個別最適な学び及び協働的な学びの一体的な充実を進めていく上で、学習におけるICT活用の特性・強みを生かした教育活動を行っていくことが期待されている。従来はなかなか伸ばせなかった情報活用能力等の資質・能力の育成や、今までの学習方法では困難さが見られた児童生徒への学習効果の発揮、そして今までできなかった学習活動の実施が可能となっている。

さらに、2023年に文部科学省が実施した「義務教育に関する意識に係る調査」では、小中学校共に半数近くの児童生徒が「授業の内容が難しすぎる」または「簡単すぎる」と回答しており、これまでの一斉指導において、全ての子供の学びを「主体的・対話的で深い学び」にできるとは限らないという結果を得た。今後は、児童生徒一人一人の興味関心や学習特性を踏まえながら、学びの実現を目指すことが重要となる。

このような状況において、個別最適な学びと協働的な学びを実現する一つ的手段として「自由進度学習」が注目を集めている。一斉指導が主流の公教育の現場で自由進度学習に取り組むには、まだハードルが高いこともあるかもしれないが、そこにはさまざまな授業改善のヒントがありそうだと考えた。

そこで、「自由進度学習」を実践する研究員を広く公募し、授業に取り組んでもらった。多くの研究員は初めての取組であり、授業を受ける児童生徒も初めての学習方法である。それでも、試行錯誤を重ねる中で、児童生徒が自ら学習に向かう姿勢やグループで話し合う様子に「自立した学習者」の片鱗が見えた。本研究は、この実践を整理し、授業改善の視点を明らかにし、「主体的・対話的で深い学び」を実装するための在り方を考察するものである。

<キーワード>

G I G Aスクール構想

I C T活用

個別最適な学びと協働的な学び

自由進度学習

授業改善

自立した学習者

目 次

I	研究主題	1
II	研究の目的	1
III	研究の趣旨	1
1	背景と国の動き	
2	「自由進度学習」とは	
3	研究の趣旨	
IV	研究の計画	2
1	研究の内容	
2	研究の方法	
V	授業実践	3
1	仁王小学校の実践	
2	下橋中学校の実践 1	
3	下橋中学校の実践 2	
4	向中野小学校の実践	
5	城東中学校の実践	
6	児童インタビューの概要	
VI	まとめと考察	11
1	研究員による座談会から	
2	考察	
	<参考資料>	16
1	「自由進度学習」児童インタビュー	
2	「自由進度学習」座談会	

I 研究主題

小中学校におけるICT活用に関する研究
個別最適な学びと協働的な学び×ICT活用

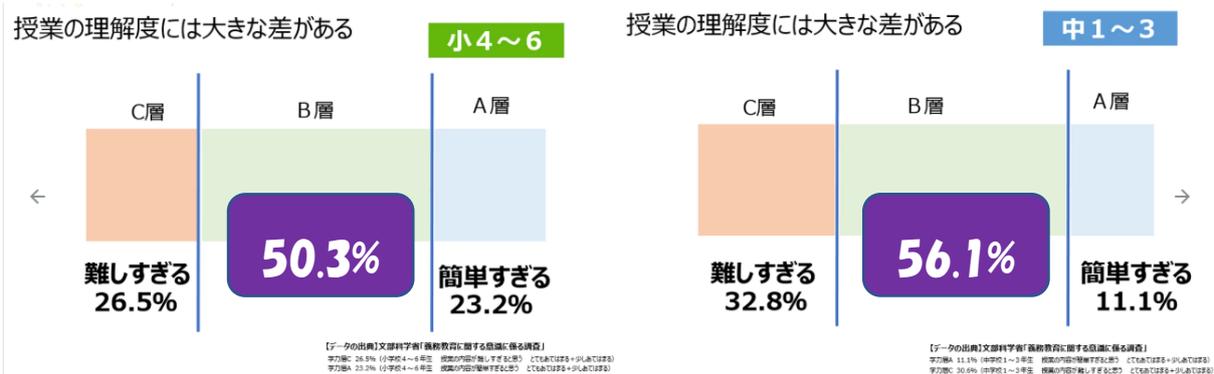
II 研究の目的

2022年の中央教育審議会「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会」において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通じて、主体的・対話的で深い学びの実現を目指すための方策等の検討の中で紹介された「自由進度学習」の在り方について、実践を通して考察し、授業改善のポイントを探るものである。

III 研究の趣旨

1 背景と国の動き

2023年に文部科学省が実施した「義務教育に関する意識に係る調査」では、小学校では26.5%の児童が「授業の内容が難しすぎる」と回答している一方で、23.2%の児童が逆に「簡単すぎる」と回答しており、半数近くの児童が現在の授業（一斉指導）にマッチングしていないという結果を得た。同様に、中学校では32.8%が難しすぎる、11.1%の生徒は逆に簡単すぎると回答している。このことは一斉指導において、全ての子供の学びを「主体的・対話的で深い学び」にできるとは限らないことを意味している。児童生徒一人一人の興味関心や学習特性を踏まえながら、学びの実現を目指すことが重要となる。こうしたことが、令和答申において「個別最適な学び」が提唱された背景にある。



出典：文部科学省サポートマガジン『みるみる』

【基本編②】「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の意義

また、2022年内閣府策定の「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」では「同調圧力や正解主義の問題点を指摘しつつ、『一斉授業からの脱却』『新たな価値創造』『イノベーション創出』『一人一人の多様な幸せ（ウェルビーイング）』を実現することが急務」と訴えている。さらに、中央教育審議会「教科書・教材・ソフトウェアの在り方ワーキンググループ」では、『「デジタル一斉授業からの脱却」これは教師が自身の授業観を変えられなければ、いくらICT機器を活用しても、子供は自立した学習者にはなれない』と指摘している。

2022年中央教育審議会「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会」で、あらためて個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について言及され、その際にカリキュラム・マネジメントの取組を一層進める方法の一つとして「自由進度学習」が取り上げられた。整備が進められているICT環境を最大限活用し、これまで以上に個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげることを期待されている。

2 「自由進度学習」とは

「自由進度学習」とは、一斉授業とは違い、子供が自分のペースで学びを進めるスタイルのことである。古くから取り組まれていた指導法ではあるが、一人一台端末が実現したおかげで取り組みやすくなった指導法である。期待される効果としては、次の通りである。

個別最適な学び：自分に合った内容やスピードで進められる。

協働的な学び：必要に応じて友達や先生と関わりながら進める。

主体性の育成：自分で計画し、試行錯誤しながら学ぶ力が育つ。

愛知県東浦町立緒川小学校などで36年間「自由進度学習」に取り組んできた小山儀秋氏の著書によると、自由進度学習は、概念形成や高次な思考を含む、より一般的な教科内容を個別化された学びとして実施するために考案された。自由進度学習の開始に際し、教員は単元のねらい、時数、標準的な学習の流れ、利用可能な学習材などを記した「学習の手引き」と呼ばれるカードを児童たちに配る。児童たちはこの手引きによって学習の内容を理解し、設定された10時間程度の中で学習をどのように進めるかを児童自身が考え、複数教科を同時進行で行うための学習計画を立てる。自由進度学習では、自身で時間配分を考えられるため、苦手な学習内容に十分な時間をかけたり、好きな内容から取り掛かったりといった選択が可能である。また、異なる内容を先に学習した児童同士での自然な教え合いが生じ、個別的でありつつ協働的な学習としての特質も自然に発生した。

3 研究の趣旨

教育界全体の背景や国の動静から、各学校では、各教科等の学習指導において、これまでの実践とICT活用とを最適に組み合わせ、令和時代における「スタンダード」として「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等の問題意識が高まると考えられる。

そこで、本研究はICT環境を最大限活用した「自由進度学習」の実践を通してその在り方を考察することにより、本市の小中学校における授業改善の視点を一考するものである。

IV 研究の計画

1 研究の内容

- (1) 「自由進度学習」を取り入れた授業実践の蓄積し、その考え方や在り方について考察する。
- (2) 「個別最適な学びと協働的な学び」の観点で「自由進度学習」を実践し、今後の授業改善の視点を明らかにする。

2 研究の方法

(1) 授業実践

- ・「自由進度学習」を取り入れた授業の実践に取り組む。

<協力校>盛岡市立仁王小学校・盛岡市立下橋中学校・盛岡市立向中野小学校・盛岡市立城東中学校

(2) 分析と考察

- ・授業実践から授業改善のポイントを考察する。
- ・児童の感想を考察の資料とする。
- ・研究員による座談会を開き、実践の成果と課題を共有する。

(3) 文献調査

- ・「自由進度学習」に関する文献や著作物などを調べる。

V 授業実践

1 仁王小学校の実践

授業者名：菅原 斉 教諭

教科名：社会科（「小学社会5年」教育出版）

単元名：第3章「未来をつくり出す工業生産」 2日本の工業生産と貿易・運輸

学級名：5年菅原学級

(1) 授業者の捉えた成果と課題

① 成果

- ・児童の主体性を育むことができた。
- ・「AAR（Anticipation-Action-Reflection）サイクル」のプロセスである「見通し、行動、振り返り」を意識し、学び方をアップデートする子供が増えた。
- ・単元内自由進度学習における「交流の時間」の有効性を確認することができた。
- ・ICTを活用する力が身につくとともに、一人一人の学びを把握することにもつながった。
- ・学び方も重視したことで、他教科にも生きる汎用的な力を育てることにつながっている。

② 課題

- ・さらに児童に委ねるための手立てについて検討していく必要がある。
- ・学習指導要領に示される内容が十分に理解されない可能性がある。
- ・学びを自己調整する力の個人差を埋める手立ての検討が必要である。
- ・追究の時間が足りないという声があり、年間の指導計画も含め、単元構成を見直す必要がある。

(2) 単元計画（6時間）と進め方のイメージ

① オリエンテーション・学習問題を作る 1時間 <一斉指導>

- ・単元の学習問題を設定する。

② 学習計画を立てる 1時間 <一斉指導>

- ・学習問題に関わる個別の問いを明らかにし、学習計画を立てる。

③ 調べる（情報収集・整理） 3時間 <個別指導>

- ・個別の問いの追究

④ 意見交換 1時間 <一斉指導>

- ・調べて分かったことを交流する。

<単元の学習の進め方のイメージ>



(3) 授業の様子

① 児童の様子

個別の問いの追究の時間には、タブレットに向かい、調べたことと自分の考えをカードに記入している。また、個人で取り組む児童も、2～3人のグループで取り組む児童もいる。なお、児童21名のうち、主に教科書（紙媒体）16名、デジタル教科書3名、インターネット2名使用。教科書を片手に、デジタル教科書やインターネットを検索する児童も見られた。

② 授業者の声掛け例

- ・「なぜ」とは、目に見えないものを調べることです。
- ・特徴を捉えるために必要なことは、「実際にどうなっているか知ること」「自分の考えをもつこと」「自分事として考えること」です。
- ・取り組む際の注意として、「何を解決しようとしているかぶれないこと」「文字だけではなく、根拠を明確に示すこと」「資料を貼り付けて終わらないこと」「自分の考えをしっかりと書くこと」です。

(4) 指導の工夫

① 社会的事象の見方・考え方を学級で確認・共有

教科書P3「社会科の見方や考え方」を活用

② 「社会科でよく使う資料の長所と短所」を児童と確認し、表にまとめて教室内に貼付

	長 所	短 所
教科書	まとまっていてわかりやすい 資料もある 学び方もっている	知りたいことがないこともある
デジタル教科書	書き込みしやすい すぐにページに飛べる 動画を見ることができる 画像を拡大できる 便利機能がある	インターネットの状況によって、遅いことがある みんなに伝えるとき（レポート）に、画像などが使いにくい ロイロノートと同時に使えない
資料集	資料が多い 教科書以外の情報もっている	調べ方や学び方などがちょっと不足している
インターネット	いろいろな情報がある	うその情報があることも・・・ 言葉や内容が難しい 情報の取捨選択が難しい

③ デジタル資料箱の設置

デジタル教科書（教師用）から写真や図表データを資料箱にアップロード。いつでも使えるようにする。

2 下橋中学校の実践 1

授業者名：千田 俊 教諭

教科名：理科（「新編 新しい科学2年」東京書籍）

単元名：第3章「動物のからだのつくりとはたらき」

学級名：2年1組・2組

(1) 授業者の捉えた成果と課題

① 成果

- ・生徒は自由進度学習の取組を当たり前と感じ始めている。
- ・生徒が自ら学び、得た知識を嬉しそうに共有してくれる姿が見られる。
- ・生徒が持つ問いと授業者として深めたい内容が重なるよう意識して進め、生徒自身が「なぜだろう」と考えられるよう工夫した結果、その姿勢を実現できた。
- ・実験がうまくいかなかったも、時間を調整し再実験を繰り返し、納得できるまで取り組む姿が見られる。

② 課題

- ・生徒をどこまで自由にさせるのか。(時間・形態・場所・方法・・・)
- ・どのように学習に向かわせるか。
- ・どのように見取り、評価をするのか。
- ・どのように学ぶべき内容に触れさせるか。

(2) 単元計画 (7時間)

- ① 学習計画を立てる 1時間 <一斉指導>
 - ・自分の課題から学習計画作成する。KWL (Know-Want to Know-Learned) チャートを活用する。
- ② 調査活動 5時間 <個別指導>
 - ・実験等は4 - 6人で行う。必要な物品は前日までに申し出る。
- ③ まとめ、班で交流 1時間 <グループ指導>
 - ・学んだことの交流会を班で行う。大切なポイントを全員に再度問いかける。

<導入時の設定とKWLチャート>

あなたは中学生でありながら、あるロボット工学者の優れた助手です。ある日、以下のような依頼を受けました。

- ・最新の技術で、人間と同じように思考できる高性能AIを発明した。これをロボットに搭載したい。
- ・このロボットは、人間の体のつくりとはたらきと同じようにしたい。私はロボット作りには詳しいが、動物が生命を保つしくみについては小学生くらいの知識しかない。
- ・中学生レベルで構わないので、人間の体のつくりとはたらきについて調査し、報告してほしい。
- ・知識だけでなく、どのような考え方が大切なのか。さらに、あなたがどのように学んだかを含めて次の用紙にまとめてほしい。
- ・時間は7日間とする。

→はい (依頼を受ける)
→いいえ (依頼を断る)

Know (知っていること)	Want to know (知りたいこと)	Learned (学んだこと)
○ヨウ素溶液はでんぷんが存在すると青紫色に変色する。①	①でんぷんが分解されるとどのような物質になるのだろうか	○デンプンは、唾液中のアミラーゼ・腸液中のアミラーゼ・小腸の壁にある消化酵素によって分解されると、ブドウ糖(糖の最小単位)になる。
○唾液はでんぷんを別の物質に変化させる。①	②消化された栄養分はどのようにして、体内に取り入れられるのだろうか。	①消化された栄養分は、胃や腸から吸収され、血液やリンパ液を通じて体内の各細胞へ運ばれる。
○ヒトの体では口や胃、小腸で消化された食べ物は、吸収されやすい栄養分に変化する。②	③ヒトはどのようにして酸素を取り入れているのだろうか	①ヒトは呼吸器(鼻や口)を通じて空気を吸い取り、肺内にある血管に入る。肺内に入った酸素は、一酸化炭素と交換される。交換された血液は、全身の細胞へ運ばれる。
○栄養分は小腸で吸収され、血管を巡って全身に運ばれる。②	④体内でできた不要な物質はどのように排出されるのだろうか	①体内でできた不要な物質は、尿や汗によって排出される。尿は、腎臓で体に不要な成分を濾し取り、血液から濾し取り、尿として排出される。汗は、皮膚の汗腺から分泌され、蒸発して排出される。
○ヒトは酸素を吸って二酸化炭素を吐いている。③	⑤血液はどのような仕組みで栄養分や酸素、二酸化炭素などを運ぶのだろうか	①血液は、肺循環と体循環の仕組みで栄養分や酸素、二酸化炭素などを運ぶ。また、栄養分や酸素は、動脈血、二酸化炭素は静脈血が運ぶ。
○ヒトは生命を支えるために、栄養分や酸素、二酸化炭素を血液で運搬している。④		

依頼に応える
→学びに責任を

細かい課題を示さない
→自分の課題設定

自分の課題から学習計画作成
→KWLチャートの活用

(3) 授業の様子

① 生徒の様子

自分の学習計画に基づき、それぞれが学習を進める。「グループで唾液の働きの実験」「個人で教科書を読み込む」「グループで人体模型を観察」「動画を視聴」など、様々な形態で学習に取り組む姿が見られる。実験は教科書に書かれている手順をグループで確認しながらすすめる。実験結果は写真・動画で保存。資料としてグループで共有する。予想通りの結果が出なかったグループは、結果が出ない原因を考え、次の時間に再度実験を行うことに決めた。

グループ内でロボット工学者に学習内容を説明する体で調査結果を発表(一人5分)する。会話ベースのやり取りをしながら発表。課題に対して、一人で黙々と取り組む者、2 - 3人で頭を突き合せて取り組む者、一人の話を大勢で聞いたり、各々の解釈について言い合ったりする姿も見られた。

② 授業者の声掛け例

- ・今までの授業では決められたコースを先生と一緒にゴールを目指しました。自由進度学習では、コースを選ぶのは個人です。寄り道したり、戻ったり、繰り返したりしながらゴールを目指します。
- ・安全面の注意、実験の意図(「なぜ、40度にするか」など)の確認

(4) 指導の工夫

- ① 生徒の学びに責任を持たせるために、「博士からの説明の依頼」に答える形で取り組みを始めた。
- ② 協働的な学びの1つの手段として、回答共有を活用する。
- ③ 学び残しを防ぐために、班ごとに学んだことの交流と大切なポイントを「博士の疑問」という形で全員に再度問いかける。

3 下橋中学校の実践2

授業者名：清水 貴之 教諭

教科名：数学科（「新編 新しい数学1年」東京書籍）

単元名：第5章「平面図形」 第1節 図形の移動

学級名：1年1組・2組

(1) 授業者の捉えた成果と課題

- ① 成果
 - ・生徒の主体性と集中力の高まりが感じられた。
 - ・自由進度学習の形が、対話的で主体的な学びに適していると実感できた。
 - ・最初は班で学び方を共有し、徐々に個別へと移行することで、スムーズな導入ができた。
- ② 課題
 - ・自由に取り組ませた際の生徒の動きが予測しにくいいため、個々の進度に対応する難しさ
 - ・単元構想力の重要性和深い学びへの支援の必要性

(2) 単元計画（5時間）

- ① 図形の移動の導入 1時間 <一斉指導>
 - ・図形の移動を言葉で他者に伝える難しさを体験する。
- ② 平行移動、回転移動、対称移動の学習 3時間 <自由進度>
 - ・認識の違いをなくし、考えを統一するために、班で学び合いに取り組む。
- ③ 1時間目の問題に再チャレンジ 1時間 <自由進度>
 - ・論理的な説明へ変換する。

<単元の指導計画>

**単元中学校第1学年
5章「平面図形」 図形の移動**
*生徒の学びの成長が見えやすい内容

○小単元の目標

- ・平行移動、対称移動及び回転移動について理解する
- ・図形の移動に着目し、二つの図形の関係について考察し表現する
- ・基本的な図形の移動を具体的な場面で活用する

①小単元を通して生徒に追わせたい
大きな問い

②各時間で生徒に追わせたい
小さな問い

(3) 授業の様子

① 生徒の様子

班を基本とした学び合い学習。教科書通りに「考えてみよう」「問」を解く班、用語の確認をする班など、また6班中4班が平行移動から、2班は対称移動から始めるなど、様々な進め方で取り組んでいる。教科書の文面を協議しながら読み解いたり、納得いかない文面については何度も聞きなおしたり、わからないことを班員に「どういうこと？」と尋ねるなどの姿が見られた。

② 授業者の声掛け例

- ・「大人になるための大切な力」とは、わからないことを認識し、粘り強く取り組むことであり、さらに周りの仲間の状況を見取って声掛けできることである。
- ・「全員達成の原則」とは、誰一人見捨てない居心地の良いクラスにしたいという願いである。
- ・「数学で学ぶ力」とは、数学的に考える力、数学を使う力、判断力を養う、考え合う力である。
- ・ノートに「学習のまとめ」「問の解法」「自分が考えたこと」などをまとめることで、ノートは思考の秘密基地になります。

(4) 指導の工夫

- ① 何が本質であるかを捉え、授業(単元)の目標を明確にすること。
- ② 生徒同士が一緒に学び、深め合えるようにすること。
- ③ 教師が生徒の発想に感動し、生徒を信じ、生徒から学ぶこと。
- ④ 教えたことは、教師が言うのではなく、生徒が発見できるようにすること。
- ⑤ 生徒の問いが生まれるようなしかけをして、生徒の動き出す方向を認めること。

4 向中野小学校の実践

授業者名：和美 智教 主幹教諭

教科名：社会科（「小学社会5年」教育出版）

単元名：第3章「未来をつくり出す工業生産」

学級名：5年4組（担任 鈴木 広太 教諭）

(1) 授業者の捉えた成果と課題

① 成果

- ・自由進度学習を繰り返していくことにより、自律的に学ぶ児童が育つことが分かった。
- ・個のとことん追究する学びと大きな問いによる協働的な学びをつなげることにより、児童は単元で育成を目指す資質・能力を獲得することができた。また、単元と単元をつなげることは、中核的な概念の獲得につながるということが分かった。

② 課題

- ・今後は、学年内の単元、学年と学年、教科等をつなぎ、具体的知識と中核的な概念、中核的な概念と具体的な知識を関連付ける児童を育てていきたい。それが、社会に参画し未来をつくる人を育むことにつながると考える。

(2) 単元計画（23時間）

第1小単元「日本の工業生産の今」（6時間）

① 事象との出会い・学習計画 2時間 <一斉指導>

- ・農業と水産業の共通点を考える。
- ・工業製品の写真の読み取りをもとに、問いをつくる。
- ・問いをもとに小単元の学習問題を設定し、学習計画を立てる。

社会科の授業では・・・

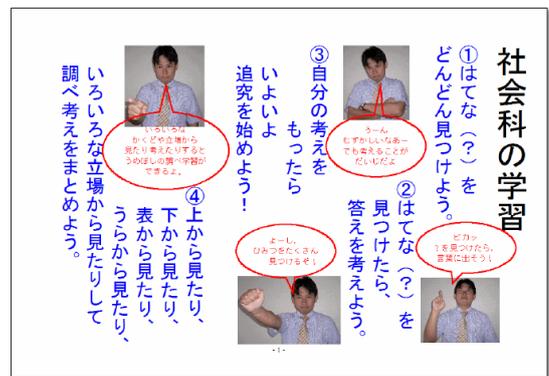
今日から、5年4組のみなさんと1単元、社会科の授業をする「和美智教（わみとものり）」です。

先生が一番好きな教科は『社会科』と『総合的な学習の時間』です。なぜかという、「人」とふれあうことができ、「人」の生き方や思いを感じることができるからです。そして、「人」の知恵や工夫を知ることができるからです。しかも、「人やものや出来事」について調べて考えていく中で、新しい発見がたくさんあるからです。

社会科では、問題を発見し（はてなを見つけ）、問題（はてな）について予想し、問題（はてな）について追究し、さらにとらえた事実をもとに考えていく（はてなを自分なりに解決する）学習をします。

それは、いざ社会（実際の生活）の中での問題に出会ったときに、自分で解決していく力を身に付けるためです。自分の生活に結び付けていくのが、社会科なのです。

みなさんと学習することが楽しみです。



- ② 個別の学習 2時間 <個別指導>
- ・工業の種類、盛んな地域、工場の規模などに関わる問いを選択し、解決する。
- ③ 話し合い（協働的な学び） 2時間 <一斉指導>
- ・収集した情報と友達の考えをもとに、「日本の産業はどのような特色があるのだろう。」について考える。

第2小単元「自動車の生産と運輸に関わる人々」（9時間）

- ① 事象との出会い・学習計画 1時間 <一斉指導>
- ・経験や第1小単元で得た知識や考えをもとに、問いをつくる。
 - ・問いをもとに小単元の学習問題を設定し、学習計画を立てる。
- ② 個別の学習 6時間 <個別指導>
- ・自動車のつくり方と運び方などに関わる問いを選択し、解決する。
 - ・自分と友達の得た情報をもとに、自動車のつくり方と運び方をまとめる。
- ③ 話し合い（協働的な学び） 2時間 <一斉指導>
- ・収集した情報と友達の考えをもとに、「工業生産と私たちの生活は、どのようなつながりがあるのだろう」について考える。

第3小単元「日本の工業生産の未来」（8時間）

- ① 事象との出会い・学習計画 2時間 <一斉指導>
- ・第2小単元の最後の話し合いをもとに、小単元の学習問題を設定し、学習計画を立てる。
 - ・工業生産の問題と貿易について調べ、問いをつくる。
- ② 個別の学習 3時間 <個別指導>
- ・工業の問題と貿易などに関わる問いを選択し、解決する。
- ③ 話し合い（協働的な学び） 3時間 <一斉指導>
- ・収集した情報と友達の考えをもとに、「これからの日本は、どのように工業生産を進めていけばよいのだろう」について考える。
 - ・これまでの産業の学習をもとに、「農業、水産業、工業の共通点は何か」について考える。

(3) 授業の様子

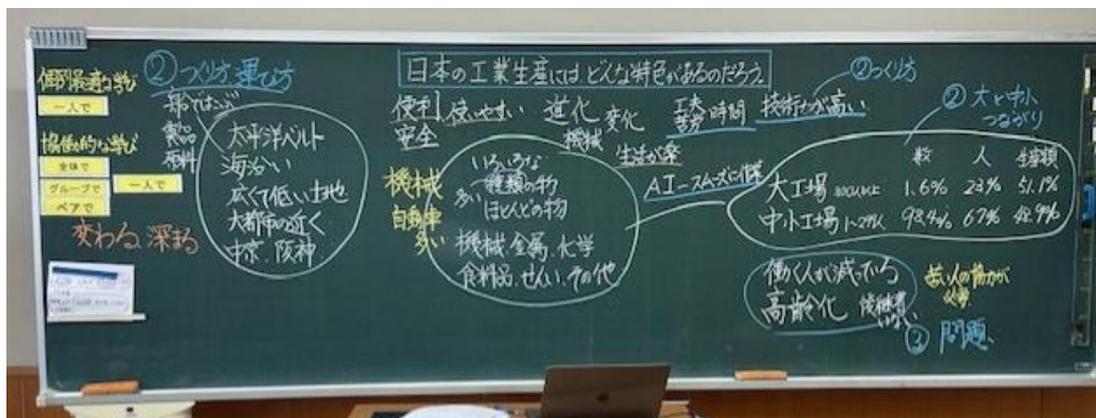
① 児童の様子

写真やグラフなどの資料を基に社会的事象と出会わせ、個々に学習課題を作り提出させる。社会科通信「はてなの解決」で、全員の学習課題を紹介し、他の児童の課題も参考にしながら、自らの学習計画を立てる。次時から情報収集と資料作成。資料の作成中、タブレットの操作方法について聞き合っている以外は児童の私語なし。授業時間が終了しても、資料や振り返りの作成に児童のほとんどが取り組んでいる。提出されたカードには、提出されるたびに授業者がコメントをつけて返却している。話し合いの前の時間には、友達のカード読む時間を設定し、必要なカードは自分のカードにつなげて個々の学習の解決の根拠となるように促した。

話し合いでは、授業者がファシリテートしながら黒板に発言を構成的にまとめた。児童が発言後に次の発言者を指名する。

休み時間にタイピングゲームに取り組む複数の児童が見られた。資料作成が終わらない児童は、タブレットの持ち帰りを申し出て、家庭で取り組むようになった。

第3小單元では、児童が学習の仕方を理解し、授業者からの指示がなくても学習を進めるようになった。



② 授業者の声掛け例

- ・単元を越えて考えることが大切。事実をとらえて社会全体を考える教科。
- ・これまで自分の課題に一人で取り組んできた学習を個別最適な学び。それに対して、学級全体やグループで話し合う学びを協働的な学びといいます。
- ・話し合いは、答えが決まっていません。一人一人が何が答えかを調べたり、考えたりします。みんなで話し合っってよりよい答えを生み出します。先生は答えをもっていません。一緒に考えます。
- ・話し合っっていても、一人一人が考えることが大切です。そして、自分の考えが変わったり、深まったりすることが大事です。
- ・大きな発問に対する答え方にまだ慣れていないと思う。今回のように、答えが無数にある課題、正解がない課題。これからの世の中では、そういう課題に多くの場面で出会うことになる。その時に答えられる人になってほしい。
- ・情報と考えをためること。その情報を爆発させるのが話し合い。
- ・2種類の「考える」がある。事実を抜き出し「こんなつながりがある」と考えること。事実をもとに「こんなつながりがあるんじゃないか」と考えること。
- ・発言は同じ内容でもよい。自分の言葉で話すこと。友達と違ければ違うほどよい。
- ・友達の話聞いて考えを更新する。深く考えることを知ってほしい。
- ・発言（情報）が正しいか確かめることも大切。
- ・「日本の未来は明るいか」（挙手）明るいと思ひ人：1/4 どちらともいえない：多数 暗い：0
これから話し合う内容は国会でも話し合う内容。国レベルの話です。夢と希望を語りあおう。
- ・食料生産と工業生産のかかわりについて話してくれた人がいました。社会科では、単元と単元のつながりや他教科とのつながりを大切にします。それは、私たちが生活している社会は分かれていないから。社会の中で生きるため、困らないために繋がりを考えられる人間になってほしいと思います。

(4) 指導の工夫

- ① 単元に個別最適な学びと協働的な学びを位置付け
- ② 問いを選択し、解決する活動（個別最適な学び・自由進度学習）
- ③ 協働的な学びにおけるファシリテーション
- ④ 中核的な概念を獲得する活動（複数単元の共通点を考える場面）

5 城東中学校の実践

授業者名：村松 伴典 教諭

教科名：数学科（「新編 新しい数学3年」東京書籍）

単元名：第4章「関数の世界をひろげよう」

学級名：3年1組・2組

(1) 授業者の捉えた成果と課題

① 成果

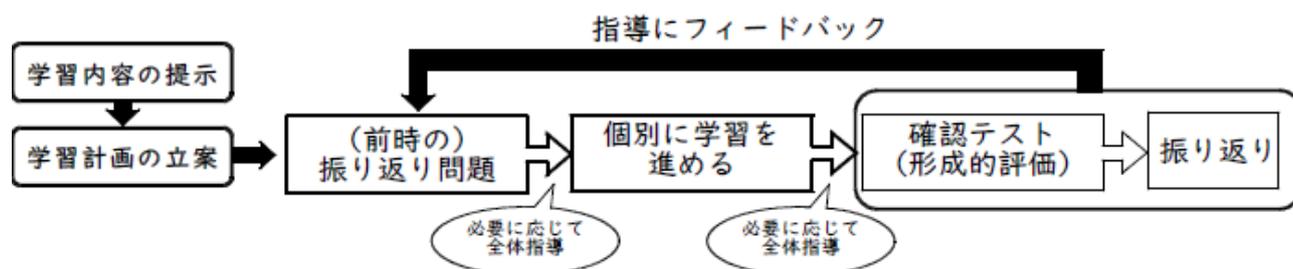
- ・指示がなくとも、どんどん学習を進める生徒が増えた。
- ・以前ならば、全くわからず手出ししなかった生徒も、友人を頼りに学習を進める姿が多く見られるようになった。
- ・互いに「知識を出し合い、教え合う」が当たり前になった。

② 課題

- ・取組を始める時期。実践するならば、1学期からスタートすることが望ましい。
- ・見通しをもつことができる具体的な課題設定や学習の手立てを構築する。
- ・学習計画の立て方。学習計画のスモールステップ化。一斉指導授業と自由進度学習の組み合わせる。
- ・生徒同士・教師と生徒の関係作り。

(2) 単元計画（18時間）

- | | | |
|------------------------|-----|--------|
| ① 関数 $y = x^2$ の導入 | 2時間 | <一斉指導> |
| ② 問題演習 | 3時間 | <自由進度> |
| ③ 関数 $y = x^2$ の性質と調べ方 | 1時間 | <一斉指導> |
| ④ 問題演習 | 6時間 | <自由進度> |
| ⑤ いろいろな関数の利用 | 1時間 | <一斉指導> |
| ⑥ 問題演習 | 5時間 | <自由進度> |



(3) 授業の様子

① 生徒の様子

授業者が示した学習内容をもとに、生徒が個別に学習計画を立て進める。「学び合い」をしやすくするために席移動は自由。授業の終末では自席に戻り、確認テストで形成的評価を行う。確認テストは「教科書の問題の数値だけ変えた問題」であり、全員が正解することを目標としている。

② 授業者の声掛け例

- ・みんなは「学ぶ力」と「学んで成長したい、できるようになりたいという気持ち」をもっています。
- ・みんなはうまくいかないことがあっても、それを生かして成長することができます。
- ・みんなには自分に合った学習の仕方を見つけることができるし、それができるようになってほしい。
- ・みんなは難しいことでも、協力して解決することができます。
- ・みんなには他の人の良さに気づいてそれを尊重し、強調する力を高めてほしいと願っています。
- ・自律（自分をコントロール）と自立（自分にとって最適な方法を自分で選択して行動）

(4) 指導の工夫

- ① 学習内容一覧表と学習計画用紙の作成
- ② 学習のヒントカード・学習動画の作成
- ③ 解説付きの解答の準備
- ④ 確認テストの準備
- ⑤ チャレンジ問題の準備

6 児童インタビューの概要

日時：令和7年11月12日 自由進度学習23時間終了後

回答者：向中野小学校 5年4組の5名の児童

聞き手：盛岡市教育研究所 佐々木秀一 専門研究員

(1) 児童の評価「自由進度学習に取り組んだ感想」

① 成果

- ・一斉指導と比較して、自分のペースで進められる利点を実感した。
- ・自分が気になる課題を自ら設定し、解決することができた。
- ・一つ一つのタスクを確実に完了する達成感を得た。
- ・より深い思考ができるようになった。
- ・パソコンを使った調べ学習のスキルが向上した。
- ・インターネット検索により考える範囲が広がった。

② 課題

- ・個人のペースで進めるため、調べる情報量に個人差が生じた

(2) 内容の理解「単元を通して学んだこと」

- ・生産者が私たちの使用している製品を作っていることを学んだ。
- ・生産者が消費者のために様々な工夫を行い、より良い製品を提供していることを学んだ。
- ・配送先の距離や場所に応じて、異なる運搬方法が使い分けられていることを知った。
- ・生産者の役割と日常生活への影響について考えた。
- ・両者に責任があることを認識し、協力することでより良い工業生産の未来を築けるという考えに至った。

(3) 学んだ力「授業を振り返ってできるようになったこと」

- ・パソコンの管理方法の習得。タイピング速度が向上し、テキストを多く入力できた。
- ・自分の興味のある課題を調べる力が向上した。課題内容をまとめる力、書く量と内容の深さが向上した。
- ・話し合いの場で調査内容を詳しく発表し、議論を活発化させる能力を獲得した。
- ・学習を進めるにつれて詳細な知識を獲得できた。
- ・生産者と消費者双方の責任について、より深く理解できるようになった。

VI まとめと考察

1 研究員による座談会から

(1) 自由進度学習に取り組んだ感想

① 全体的な評価として

- ・自由進度学習の実践に対して、全ての研究員が肯定的な評価していること。

② 児童生徒の学習に対する姿勢について

- ・全般的に生き生きとした学習態度で取り組んでいたこと。

- ・多くの児童生徒の主体的に問題解決に取り組む姿が見られたこと。
- ・自然発生的な教え合い・学び合いが生まれたこと。
- ・情報収集能力と情報活用能力の向上を感じたこと。

③ 教師の役割の変化について

- ・「教える人」から「共に学ぶ人」への立場転換をすること。
- ・子供の「やりたい」という主体性と教師が「学んでほしい」内容の調整が難しいこと。
- ・個別対応と全体把握の両立に難しさがあること。

④ 単元構想の重要性について

- ・一度始めると大幅な修正が困難であること。
- ・スモールステップでの知識・技能の定着が必要な場面もあること。
- ・全単元での実施は現実的には困難であり、部分的な導入が妥当だと考えられること。

(2) 自由進度学習の指導のポイント

① 単元構成の工夫

- ・「児童生徒に学習を委ねる」ことを基本にして単元構成に注力すること。
- ・自立した学習が深い学びを実現するという考えに基づき単元を構成すること。

② 問いの質の向上

- ・子供たちの問いと教師が深めたい内容の一致を目指すこと。

③ 「自立した学習者」の育成を目指すために

- ・児童生徒への学習の委任すること。
- ・課題解決の手立てを児童生徒が自己選択できるようにすること。
- ・授業者は必要に応じた指導の修正と一斉指導の併用も考えていくこと。

(3) フリートークから

① 授業者の立ち位置と具体的な声かけ

- ・子供たちの間に入り、考えを聞きながら学びを広げる。
- ・「これってどういうこと?」「なぜそう考えたの?」といった問いかけを重視した。
- ・教える側ではなく、同じように問う姿勢で対話を促進した。
- ・ゴール像を持ちつつ、問うことで対話を深めた。
- ・まとめ方や資料収集のスキルの向上を支援した。
- ・解き方ではなく、解決方法のヒントを提供した。

② 実践から見えた効果

- ・学習進度の個別化
 - *最初は時間がかかるが、自分に合ったペースを模索する様子が見られた。
 - *早く進んだ児童生徒が、他の児童生徒を教える仕組みが自然に形成された。
- ・教科書活用の重要性
 - *児童生徒同士で教科書を読み解く過程が学習効果を高めると感じた。
 - *数学では教科書を徹底的に活用する様子が見られた。

③ 実践から見えた課題

- ・「検索」や「共有」以外のより効果的なICT活用
- ・各教科における探究活動の推進
- ・児童生徒同士の教え合いを促進する環境づくりを継続

(4) 先生方へのメッセージ

- ・先生方には、失敗を恐れず改善する姿勢で挑戦してほしい。
- ・自由進度学習に取り組む目的は、「自立した学習者」の育成であることを理解してほしい。
- ・自由進度学習に取り組むことによって、児童生徒が「学ぶ責任の自覚」を実感できる。
- ・単元のゴールを明確にし、段階的に自由進度的な指導を導入することをお勧めする。

2 考察

(1) 授業から共通して見えたこと

① 何もしない児童生徒がない。

学習が個人に委ねられているために、どの授業でもすべての児童生徒がタブレットを操作していた。教科書や資料集で調べるほかに、インターネットで検索したり、動画を視聴したりと、様々な方法で学習に主体的に取り組む姿が見られた。

② 児童生徒が質問しやすい。

一斉指導のような拘束感がなく、自由に話せる雰囲気があるため、タブレット操作に関する質問や学習に関する疑問を児童生徒同士で聞き合うことができる。漢字の読みなど一斉指導ではスルーされるような小さなつまずきでも即時に解決できる安心感が教室にある。

③ 何につまずいているか把握できる。

一斉指導よりも授業者に直接質問しやすく、児童生徒が何に困っているか知ることができる。児童生徒同士の会話に耳を傾けることにより、つまずきを把握することができる。

④ 教師が学習する意義や学び方を話す場面が多い。

授業実践の「授業者の声掛け例」で記載したとおり、授業の中で「学習する意義」「仲間と協働する大切さ」「今求められる人間性」などを語ることが多い。自由進度学習に取り組む意味を児童生徒と共有し、授業を共に創っていかうとする決意にも感じた。

(2) 変えていきたい固定観念

① 教えればわかる、定着する。

「教える」ことで理解が深まることもある一方で、自分で気付いたことのほうが深く身に着くこともある。「教える」ことは一方通行ではなく、「気付きを促す」ことが含まれている。問いかけたり、ヒントを出したり、環境を整えたりすることで、児童生徒が自分で「わかる」ように導くことが大切である。

② 読めばわかる。

教科書のように情報が書かれていれば「読めばわかる」と思いがちだが、実際には簡単ではないことも多い。児童生徒の知識、文脈の理解、言葉の捉え方、集中力、そのときの気持ちなど、様々な要素が「わかる」に影響してくる。

③ 紙に書かなければ、知識は定着しない。

これまで、手を動かして書くことには、記憶を助ける力があると言われてきた。しかし、視覚的に覚えるのが得意、聴覚優位、体験型の学びが効果的など、児童生徒には多様な学習特性があることが知られてきた。「紙に書くこと」は有効な方法の1つであるが、それが唯一の方法ではない。

④ 他人の解答を見た答えは自分の考えではない。

もちろん、ただ写しただけなら、それは「自分の考え」とは言えない。しかし、他人の考えに触れることで、自分の視野が広がったり、新しい発想が生まれたりすることもある。「他人の解答を見ること」で、それをどう自分の思考に変えていくかに目を向けたい。

(3) 自由進度学習から見えた授業改善のカギ

- ・子供を信じる覚悟をもつ。
- ・単元を通して授業を構成する。
- ・デジタル学習環境が未来を照らす。
- ・柔軟に変える勇気をもつ。

(4) 研究を終えて

はじめに、昨年度「小中学校におけるICT活用に関する研究—学習者用デジタル教科書及びAI型ドリルの効果的な活用について—」で、まとめに書いたことを昨年度の状況を確認するために再掲したい。

* 一人一台のタブレット端末の配備は、授業を変えるチャンスだと捉えている。一人一台端末が実現したことで、「自分に合った学び方を児童生徒自らが選ぶ」という学習の新たな可能性が大きく広がった。「主体的な学習」「個別対応」「声なき声を拾うこと」「学習障害への対応」など、これまでは教師の工夫でなんとか対応してきたことにやっとタブレット端末という支援が行き届いた状況にある。この状況を有効に活用することこそが、児童生徒にとっての「深い学び」の創出になると考える。

* ICTの活用により「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が可能となった今、めざすものは「自立した学習者」の育成であると強く感じている。

* しかしながら、教師のこれまでの授業方法との継続性もある中で、今までの授業の良さを次の新しい学びにどう継承していくかが喫緊の課題となる。

* 「教師の仕事は教えること」「教師の指示のもと、全員が一斉に同じ活動をさせるのが授業である」といった旧態依然とした授業観から抜け出せないことが、授業が変わらない要因と考える。そのような授業観である限り、学習者用デジタル教科書をはじめとするICT機器を活用したとしても、「デジタル一斉授業」にとどまってしまう現状である。

* 「児童生徒は主体的に学ぶことができる」「学び方は多様であり、どのような方略が個々の児童生徒に友好かを考えるのが教師の役割の1つ」という意識を校内の教師間で共有できれば、教師個々ではなく、学校としてどのように児童生徒の資質・能力育成に取り組むべきか明らかになると感じている。

* 例えば、学習者用デジタル教科書やAI型ドリルを自由に使える時間を設ける。児童生徒が自分の学習の仕方を自分で考える機会とし、児童生徒がどう課題を立て、どう自己調整しながら学習を進めるかを把握することも必要と思われる。「自立した学習者」を育てる「授業観の転換」には、教師が児童生徒の力を信じることが重要だと感じている。

上記のような状況を踏まえ、「自立した学習者」の育成を具現化する指導方法として「自由進度学習」に取り組むこととした。ご協力いただいた学校・先生方は、ICT活用を前向きに捉え、日頃から「自立した学習者」を育成するための授業の構想に真摯に取り組んでいる。今回の取組を通して、どの先生からも「現状を変えていかなければならない」という熱意が伝わってきた。

しかしながら、「自由進度学習」は、そもそも「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するための一手法にすぎず、万能な指導方法ではない。また、1回の学習で結論を求めるのは、あまりにも性急である。

それにもかかわらず、前述のように、授業改善の鍵として「子どもを信じる覚悟をもつ」「単元を通して授業を構成する」「デジタル学習環境が未来を照らす」「柔軟に変える勇気をもつ」といった視点が整理されたことは、一定の成果として評価できる。これらの視点は、「自立した学習者」の育成を目指す上で、「授業観の転換」に資する重要なキーワードである。

自由進度学習を推奨している加賀市の元教育長島谷千春氏は、自著「BE THE PLAYER 自治体丸ごと学びを変える、加賀市の挑戦」(教育開発研究所)の中で、「いわゆる『個別最適な学び』の一手法として、学習の進度を個々に委ねる自由進度学習があります。しかし、加賀市がそれを推進したのは、方法そのものを目指したのではありません。子供の学びの苦しきの大きな要因である『みんな一緒に』というペースに縛られる状況を解き放つために進めた結果、自由進度の方法が広がったのです。したがって「これは自由進度学習と呼べるのか」といった議論は、私たちにとっては価値のないものです。」と言っている。自由進度学習は、児童生徒の実態に即し、少しでも伸ばそうとする取組である。研究員の先生方が口々に言うように、「やってみなければわからない」取組である。本市でも、個別最適な学びと協働的な学びの実現という本質を踏まえて、自由進度学習の実践を重ねていきたいと考える。

一方で「自由進度学習で学力は育つか」という疑問も残る。この場合の「学力」とは、多くの場合「知識・技能」のことを指している。残念ながら学力に関するエビデンスはない。実際に「中学3年生は高校受験もあるから、自由進度学習はできない」という先生方もいる。しかしながら、自由進度学習は、自分のペースで学習を進められるスタイルであり、自分の理解度に合わせて繰り返し学べることから、つまづきを放置せずに進めることができ、基礎・基本の定着は図られると考える。さらに、自己調整力や学びへの主体性、将来への学び方の基礎は身に付くといえる。

なお、「学力」については、知識偏重や正解主義の問題点が指摘される状況で、育てたい「学力」をどうとらえるべきかを議論する必要があるとも感じた。これには、高校や大学の入試制度の検討も含まれる。

考察の結びとして、GIGAスクール構想の第2フェーズにあたる「NEXT GIGA」を踏まえ、今後、取り組むべき重点を上げる。

*一人一台端末の「定着」と「深化」

端末を「使える」だけでなく、「学びを変える道具」として活用できるようにすること。

*個別最適な学びと協働的な学びの両立

子ども一人一人の理解度や関心に応じた学びを支援しつつ、他者と関わりながら学ぶ力も育てること。

*教員のICT活用指導力の向上

先生たちがICTを効果的に使いこなせるように、研修や支援体制を整えること。

*学習データの活用

学習履歴や成果を蓄積・分析して、よりよい指導や学習支援につなげること。

*教育の情報化の「標準化」と「持続可能性」

学校ごとの格差を減らし、どこでも安定してICTを活用できるようにすること。

終わりにになりましたが、御協力いただきました校長先生をはじめとする学校の先生方、特に授業の提供に積極的に取り組んでいただいた研究員の先生方に心より御礼を申し上げます。

《資料1》「自由進度学習」児童インタビュー

R7/11/12 向中野小学校

【回答者】

向中野小学校 5年4組の5名の児童

【聞き手】

盛岡市教育研究所 佐々木秀一 専門研究員

○社会科「未来をつくり出す工業生産」23時間の授業後に5名にインタビューを行いました。

<児童A>

聞き手(以下聞):未来を作り出す工業生産で学んだことは何ですか?教えてください。

児童A(以下A):生産者がいろいろ工夫して、車とかをつくらしている。

聞:自由進度学習に取り組んだ感想を教えてください。

A:パソコンとかも使えるし、一人でやっているから、一人でできる力とかもつくからいいと思う。

聞:何の場面が一番楽しかった?

A:パソコンで調べたりとか。

聞:そういうのは得意ですか?

A:得意ではないけど、調べるのが好き。

聞:この授業を振り返って、できるようになったことって何かありますか?

A:パソコンを使うから、パソコンの管理の仕方とか、タイピングが速くなった。

聞:なんかこういうこともやってみたいな、なんていうのはある?今回の授業みたいな形で。

A:パソコンはもっと使いたい。学習とか調べるとき。

聞:何の教科が合うと思う?

A:やっぱり社会かな。理科とかにも使えるんじゃない。気象情報とかやってたし。

聞:ありがとうございました。

<児童B>

聞:未来を作り出す工業生産で、学んだことは何ですか。

児童B(以下B):工業生産とか物を作っている人には生産者がいて、その生産者が僕たちが今使っているものを作って、それを使って今生きていく、生きていること。

聞:自由進度学習に取り組んだ感想を教えてください。

B:自分で決めた課題とかの範囲を自分で終わらせることができ、その先生がやるとなんかたまにちょっと長いっていか、範囲が難しくてあんまり進まなかったっていうことが

あったけど、自分で決められるから終わらせられた。一つ一つを終わらせることができた。

聞:一番印象に残っている場面とか何かありますか?

B:終わらせた瞬間の爽快感。

聞:この授業を振り返って、できるようになったこと、何かあったら教えてください。

B:課題の内容とかをまとめて、それを書いたりすることの力がついた。

聞:量が多くなった?

B:書く量だとか内容だとか深くなった。

聞:タブレットで授業してきたけど、もっとやってみたいなのというのはある?

B:なんか理科とかだと、理科でその調べていることの動画っていか、映像を見るかもしれない。

聞:なるほど、わかりました。ありがとうございます。

<児童C>

聞:未来を作り出す工業生産で、学んだことは何ですか。

児童C(以下C):生産者と消費者の関係とか、どっちとも責任があるからこそ、どのように行動とかしたらいいか、責任があってできる行動だからこそ、日本の工業生産の未来を変えるために、消費者も生産者も、協力して頑張っていくと、もっとより良い工業生産にできるんじゃないかなって思いました。

聞:自由進度学習に取り組んだ感想を教えてください。

C:比べていいですか?前まで水産業の時とかまでは、教科書とかノートでやっていたんですけど、その時はみんなを見て全体のペースで学習を進めていくから、自分だけわからない問題があって、みんなについていけなかったりっていう時が結構あったんですけど、でもその自由進度学習でタブレットを使ってやる時に、その個人で自分に合ったペースで学習をしていくことができるから、より考えが深まるなと思ったし、あとは、インターネットでグーグルとか使うことで、より考える輪が広がるからいいなって思いました。

聞:この授業を振り返って、できるようになったことがあれば教えてください。

C:最初は具体的にしか分からなかったけど、どんどんやっていく、やっていくうちに詳しいこととか、最初に言ったように、生産者にも消費者にもどっちにも責任があるっていうことを知ったり、最初よりもっと詳しく知ることができたなって思いました。

聞:自由進度学習を他の教科でもやってみたいのかな、他

の単元でもやってみたいなと思う？

C:まあ思います。やっぱりでも、難しい問題とかをタブレットでやっちゃうと、どうしてもやっぱりインターネットとか使いたくなっちゃうので、そこはちょっと直せたら直したいなと思うんですけど、でもやっぱりタブレットでやると、その安心というか、手を挙げて発表するよりは、自分で一人でその手も上げずに、みんなにわからないで、その先生とやり取りしたりしてやるのが、恥ずかしくないというか、より学習するペースが上がっていくんじゃないかなって思います。

聞:ありがとうございました。

<児童D>

聞:未来を作り出す工業生産で、学んだことは何ですか。

児童D(以下D):学んだことは、まず一番最初は、生産者が消費者のために、いろいろな工夫を通し、より良い製品を、消費者に渡していたことと、あとは運び方などが、いろいろな、遠くだったら何々とか、いろいろな運び方に、運ぶ場所によって違うことを学びました。

聞:自由進度学習に取り組んだ感想を教えてください。

D:私はとても自由進度学習がいいと思いました。訳は、自分のペースでできたし、今回は自分の気になる課題を自分で解決することができたからです。

聞:この授業を通して、できるようになったこと、何かあったら教えてください。

D:できるようになったことは、まず自分の好きな、自分の気になった課題などを調べて、それを詳しく、その話し合いの時に話せて、その話し合いを大きくできたことだと思います。

聞:課題を立てることって難しくなかったですか。

D:難しかったけど、一回目調べた時とかから、何か「え？何でだろう」という疑問がたくさんあったから簡単でした。

聞:普段からそういう何でだろうって思うことって多い？

D:あるけど、今回の社会がもう最初から疑問がたくさんあった。多分、今回だけかもしれない。

聞:今回みたいな授業を他の教科でもやってみたい？

D:はい。

聞:どんな教科だったらできそう？

D:例えば、国語とか。話し合いとかの時に、いろいろ国語って答えがないから、自分の考えを話したりするのが難しい人でも、いろいろ共有とかを開けば、みんなの考えがちゃんとわかるし、やっぱり話し合いとかの時は、みんなですべていって、話し合いがなんか大きくなることはなるけど、で

もやっぱりなんか、タブレットでもやっぱり国語の話し合いはみんなですべての方がいいけど、国語のその話し合いの前の話し合いを広げる場面とかは、タブレットで自分の考えをたくさん書き込んだ方がいいと思います。

聞:なるほど、わかりました。ありがとうございます。

<児童E>

聞:未来を作り出す工業生産で、学んだことは何ですか。

児童E(以下E):はい。最初は工業製品の分類について学びました。その後に工場がどこにあるかなどを学びました。そして最近では、生産者は消費者のために、いろんな工夫や苦勞をしていることが学びました。

聞:自由進度学習に取り組んだ感想を教えてください。

E:自由進度学習は、自分の「はてな」、自分が知りたい「はてな」を自分で考えて自分で取り組んでみたけど、自分のペースでできるからやりやすかったけど、実際に最後の発表になって、自分のペースでやるから調べている内容や情報の量が人によってだいぶ差があって、発言の数とかがだいぶ違いました。

聞:この授業を振り返って、できるようになったことがあれば教えてください。

E:はい。最初ではテキストに何を打てばいいのかも分からなかったし、たくさん時間がかかったけど、今ではタイピングも速くなったし、テキストいっぱい打てるようになったし、もう慣れてきて、最初はひとつのテキストしか打てなかったけど、最近では二つのテキストを書けたりと、振り返りを長文書くことができました。

聞:こういう授業をまたやってみたいと思いますか？

E:はい。

聞:どういう場面がいいと思いますか？他の教科でもできるかな？

E:他の教科でもできるけど、今回社会ですべてのからか、社会に結構向いているのかなとは思いました。

聞:何が一番、やっていて楽しかった？

E:何をやってってっていうか、最初は、テキストに打つのも難しかった難しかったけど、どんどんできるようになって、自分の成長を感じたところが嬉しかったです。

聞:苦勞したことって何？

E:私は結構インターネットで調べることが多くて。でも教科書で調べてみたら、インターネットの内容と違ってたから、そこには少し時間がかかって大変でした。

聞:ありがとうございます。

《資料2》 「自由進度学習」座談会

R7/12/5 下橋中学校

【出席者】

仁 王小学校 菅原 斉 教 諭
向中野小学校 和美 智教 主幹教諭
下 橋中学校 千田 俊 教 諭
下 橋中学校 清水 貴之 教 諭
城 東中学校 村松 伴典 教 諭

【進 行】

盛岡市教育研究所 佐々木秀一 専門研究員

○指導するに当たって工夫したポイントは？

仁王小 菅原先生：学習をするにあたって工夫したところっていうのは、子供たちに委ねるので、どういう単元構成にしようかなっていうのはすごく工夫しました。絶対子供たちだけの問いではたどりつけない深めたい問いっていうのは出てこないだろうなというところがあったので、一回交流した後に、こっちがどういう投げかけをして子供たちを次の問いに導くかっていうところが一番工夫したというか、注力したところかなと思います。



向中野小 和美先生：自由進度学習にはすごくもともと興味があったんですけども、やっぱり子供が自分で学習を進めていくっていう自立性を育てていきたいなと思っていましたし、それだけじゃなくて、その自立の学習があるから深い学びが実現するっていう単元構成をしたいなというふうに思ってやりました。

そのために、子供自身が自分の関心とか学習状況を見つめながら、自分の学習を進めるっていうことで、問いを作って、問いを選択して、様々な方法で解決していくっていう学習を組んできましたし、そのとことんこの学びがあった上で、大きな問いで協働的に話し合うっていうことを、そういうふうな環境を作るっていうことを大事にしてやってきました。

下橋中 千田先生：自由進度学習は初めてではなかったのですが、前回やってもうちょっとこうしたかったなというところ、特に子供たちが問いを持つ、先ほどの和美先生もあつたんですけど、こういう問いを持ったところが、授業者として深めたいのと重なっているといいなと思いつながり進めていきました。なかなか重ならない部分もあるんですけど。重ならなかったところは、途中途中で聞いてみたり、単元の最後のところで、「ところで、こういうのどう？」っていうふうなのを投げかけたりして。できるだけ子供たち自身が、「なんでだろう」というふうな思っているように考えたいなと思って、少しだけできたかなと思います。

下橋中 清水先生：今回、自由進度の形は初めてだったんですけど、やってみて三つあります。一つ目が、そもそもなんでこの形でやるかっていう必要性ですね。言いかえると教師の願いだと言っていいと思うんですけど。やっぱり教育の目標は、人間を育てることなので、「君たちにこういう学習を通して、どういう人間になってほしいか」という願いをしゃべりました。二つ目はあの学習の必要性ですね。なんでこの学習をやっているのかと、最後どこをゴールにしていくのかっていうことは大事にしました。今回でいうと、数学の平面図形の学習を扱ったんですけど、第一で扱った内容と最後に扱った内容が同じなんです。でも同じ内容なんだけども、最初はなんとなくでしか説明できなかったものが、最後は数学の言葉を使って百人いたら百人全部わかるような説明になるっていうことを目標にしてやっていると、じゃあ教科書には何が書いてあって、どんなことやってたらいいんだろうっていう必要性に迫れるかなと思って。そういうことを、ポイントとして扱いました。三つ目は、子供たちの可能性を信じるって言ったらいいいんですかね。可能性を。やっぱり先生って心配なので、いろんなことを手回しがちなんですけど、でも、勇気があることなんですけど、でも一回預けてみて、それでもダメだったら修正すればいいと思うんですよ。特に数学って答えがはっきりしているので、すぐに「これだよ」と言いたくなるんですけど、子供たちから質問が来たとして、「でもここポイントにして考えたらいいいんじゃないの？」とか、「そこじゃないよなあ」とか、なんとなく手助けしながら、でも最後は子供たちが発見して、子

供たちが必要を持って解決するということに注力し、ポイントにしました。

城東中 村松先生：私も初めて自由進度学習っていう取組をさせていただいたんですけれども、始めるにあたっては、まず子供たちに私としての教師からの願っているのを初めに話をさせてもらいました。言葉とすると二つありまして、「自らを律する自律」、そしてもう一つは「自分で立つという意味の自立」。この二つの「じりつ」が、今回の学習を通してできるようになってほしい。これを初めに伝えさせてもらいました。そして、実際に始めた後は、本当に子供たちにほぼ丸投げにできないということで、できるだけ自分で課題を解決するための手立てを自分で選べる、そういう手立てを組ませていただきました。

そのもとに進めていって、もちろん壁がちょっと出てきたんですけど、その際はある程度修正をして、場合によっては一斉指導も時折交えながら進めていくという方法で、考えて実践をしてみました。まず今回の取組で、本当に初めて取り組んで、何をやったらいいかということで様々勉強させてもらいましたけれども、できればまた取り組んでみたいかなというのは本音で思いました。計画の立て方云々関連というところは、私の課題として残りましたので、次は訂正をして、いつかまたチャレンジをしてみたいと考えています。

○取り組んでみての感想は？

仁王小 菅原先生：やってみた感想っていうのは、やっぱり、まだ迷っているっていうのが正直なところで。いろんな単元を自由進度でやってみたんですけど、正解というか、これがいいっていうのは、なかなかやっぱり自分の中で自信が持てなくて。というのも、こっちがこう教えたいとか押さえないって思うことをちょっと強めに出した授業の構想だと、子供の主体性とか思っているのは絶対に、ちょっと減衰するというか、シュンってなっちゃうし、かといって子供に委ねすぎると修正が大変というか、やっぱりどうしてもどっかでクッてちょっと引っ張る瞬間があって、その兼ね合いとかバランスっていうのがすごい難しいなっていうので、まだまだ模索中です。でもやっぱり言えるのは、子供に委ねるとすごく子供が生き生きとして楽しいし、私もその成長する姿を間近で見られ

てすごく楽しいなというふうに思っています。

向中野小 和美先生：私はこう飛び込みで、はじめましてからスタートしたんですが、本当に子供たちが変化していくし、子供が本当に生き活きとしていたし、子供が楽しんでいて、本当になんかこうずっと続けたいなというふうに思うような時間でした。自分で問いを持って解決をしていくので、普段の一斉授業と違って、収集してくる情報の幅がすごく広くて多様だということがすごく良かったなというふうに思っていますし、様々な方法で子供は情報を収集してくるので、すごく情報活用能力が育っていったなというふうに感じています。先ほど話したんですけど、多様な考えや情報を持ってくるので、話し合いをした時にすごく深さが違うなというふうなことも感じました。多様な情報が出てくるので、いろんな視点で子供たちが考えることができるのが良かったと思いますし、自分が自分の問いを持って、自分で情報を収集した情報っていうのはすごく引き出しやすいなというふうに思っていました。一斉授業の時は、教師は押さえたつもりでいるんだけど、なかなか次の時間そのことを使って考えることができないんだけど、自由進度学習で自分で掴んだ情報っていうものは、考える際に根拠として持っていきやすいということがわかって、そこもすごく良かったなというふうに思っています。

なんか自分としても幅が広がったなというふうに思って、すごく楽しかったです。



下橋中 千田先生：実は今も続けて他の単元でも自由進度学習でやっているんですけど、自由進度学習じゃなくする、やめ時が難しいなっていうのが正直なところで、子供たちはもう割と自由進路でやるのが当たり前じゃない？っていう風な感じなので。新しい単元に昨日ぐらいから入ったんですけど、「自由進度でやるよ」って言ったら「ふーん」みたいな感じで、別に大したリアクションもなく、「そうだよね」っていうふ

うな捉え方をしているなと思っています。感想というか、こうなりたいなというのは、先生は教える人っていうより、子供たちに教えてもらうような立ち位置に自分自身になれるようになるというふうに思っています。自由にいろんなことを学んでくれる部分もあるので、自分自身も知らないこととかを教えたりもしますし、もちろん押さえてほしいなという部分を子供たちが得意げに「こうなんですよ」っていうふうに言ってくれるのを見るのも、「よしよし占めたものだ」というふうに思ったりするので、できるだけ自分のスタンスとして「教えるんだ」っていうふうな気持ちでいるんじゃないくて、「教えてちょうだい」っていう感じで、子供たちに接するようにしていくといいのかなって思っています。



下橋中 清水先生：やってみた感想は、結論はとても良かったなあって思っています。ですが、最初やる時は怖かったなって、正直に。特に、あの「じゃあやっごらん」って言った瞬間はかなり怖かったです。理由は、まず手を離した時に、「やっごらん」って言った瞬間に子供たちはどういう動きするんだろうっていうのがさっぱり想像つかなかったっていうことですね。二つ目は、やっていく時に、いつどの子が何をしているかっていうのがもう全然全くバラバラですよ。だから、やっぱり何をしているかっていうことは把握したいし、子供たちが言葉がけしてほしいタイミングに言葉がけしたいなと思うので、そういうの見とって頑張ってるんですけど、そういうことをやっていくと先生の力量を試されるなって正直思いました。あとは三つ目、怖いなと思ったのは、一回大きな流れでスタートしてしまえば修正効かないですよ。多少ちっちゃな修正は効くと思うんですけど、やっぱりそういう単元を帯で考えて、ここをゴールにして向かっていくんだっていう、あの単元構想の力が試されるんだよなって思いました。で、子供たちが学んでいく中

で、「ああ、いいな」って思ったのは、子供たちが全員頭を働かせて、一斉指導で働かせていないわけじゃないんですけど、でも自分で決めて、やっていくところなんにも食いつきが違うんだなということ。課題を決めるって言うても、一斉指導だと学級で「これでやっごこう」みたいな形になると思うんですけど、個々の生徒がこれを決めていくっていうのは大きな違いだなって思いました。やっていく中で、主体的対話的はこの形でいけると思うんですよ。さっき先生も言ったと思うんですけど、深い学びへのきっかけは、先生が作らなきゃいけないし、支援が必要だなと思うので、そういうところは入っていかなきゃならないなって思いました。今回は自由と言いつつ、ちょっと班でやったんですけど。最初は学び方を班で学んでいって、でも少しずつ少しずつ手を離して、いろんな形でやれたらいいのかななんて思いました。

城東中 村松先生：実際に取り組んでみての感想です。まず初めに、実際試行期間っていうことで小単元でちょっとやってみたところ、できそうかなという手応えをつかんだので、まずちょっとは自信を持ってやっごはみたつもりではありました。でも、実際単元をまるまるということで、ちょっと挑戦をしてみたのですけれども、なかなか厳しい場面も正直ありました。教師の手助けが必要な場面が多くなってしまったので、それは先ほどもお話しましたがけれども、一旦全体で知識技能に関わる部分の確認をしてから、改めてまた子供たちに委ねるといった、そういった形での修正は必要になりました。実際取り組んでみて良かったと私は考えています。想像以上に子供たちが自分たちで何とか解決しようと、私は三年生で試させていただいたんですけど、一斉指導で取り組んでみた後、黙っているただ分からなくてピタッと固まっているような子が、これでどうにかして解決しようと、友達のところへ駆け寄って行って教え合いが始まったり、あるいはあちらこちらでグループができて「どうするんだ？」「ああするんだ」っていう。自然と課題解決のためのグループが出来上がっていったっていう、そういうことができたっていうことが、まず面白いなっていうのがあったかなと考えています。ただ、これには元ネタがありまして、私は4月から今の学年の数学に入っただけですけど、初めから問題を解くような場面では

別に隣同士でなくても学びやすい子たちのところで集まって学習してもいい。ただし、最後の説明の時は自分の席に戻るよ。このルールをずっと実践してきました。そこに自由進度学習ということで、そういったエッセンスを加えたということで、子供たち自身の自身で学ぶというところは深まっていったのではないかなと考えています。

今日も授業をしてきたんですけども、教え合い学び合い、分からなかったら仲間同士で解決したいというのが当たり前になってきたので、今回のこの取組はよかったかなと思います。ただ、課題点は多々ありましたので、いくつかお話をさせていただきますと、単元全体でやろうとするとかなりきついです。

正直な話。スモールステップである程度知識、技能は一斉指導で、解決のための知識、技能は子供たちに言葉悪いですが教え込む、まずは確実に定着させる。そうした上で自由進度学習という流れに持っていく。ある程度終わったら、また次のステップへいくという流れがいいのではないかなというのが、今回を通しての本音の感想でした。

あとはこの自由進度学習。これを成立させるために一番大事だなと思ったのは、学級経営、そういったところではないかなと感じました。その学級の中で誰とでも話ができる、そういう関係がしっかりできていれば、この自由進度学習というものは成立していくのではないかなというふうに本当に感じました。

もちろん、教師と生徒の関係も良好なものでなければうまくいかないだろうなと思いましたので、改めて人間関係の大切さ、学級経営の大切さということも感じさせてもらいました。

〇ここからはフリートークです。

「先生方はどういう立ち位置で回っていますか？」

下橋中 清水先生（以下、清）：班とか回っていて、いろいろ書いていることで、「これってどういうふうに考えたの？」「どこ読み取ったの？」とか「何を調べたの？」っていう。まあ今までの先生の方が教えるなどかかっていうことを言いたいわけじゃないんですけど、でも子供たちの間に入って、子供の考えを聞いてって、「あ、そうやってやるといいんだ」みたいなことを広げてくみたいなのは。そうだなって思ったんです。先生たち

ってこうやっている時に回って歩いていると思うんですけど、どういう立ち位置で回ったりしているのかな。あと、どういう声がけしているのかなっていうのは、なんかそっちも聞きたいなと思っていました。どう思うんですか。

下橋中 千田先生（以下、千）：今回やったところは、そのまず単元の最初にこう場面設定して、「ある人に説明しようね」みたいな、そういう流れでこう始めたので、その説明をしてもらう側の人のつもりで、その自分が授業中にウロウロしながら「これってどういうこと？」みたいなことを聞いてくってという、一応ロールプレイをして、もちろんそんなこともなく、ただ「え、なんで」みたいな感じの時もあったんですけど、イメージとしてはそんな感じでやってみると子供たちが教えてくれるかなと思ったのでやりました。なぜそうしたかっていうと、前回やった時は「こういうことを学んでね」っていうのをこっちからかなり示していたので、もっとなんかちょっと偉そうだなと思ってこういうのを教えてほしいな。「その単元のことについて教えてほしい人がいます。それについて学んで説明してください」っていう風にやると、子供たちも「教えるぞ」って気持ちになるかなと思って、やりました。どんな感じですか。

向中野小 和美先生（以下、和）：私自身はもう何て言うんですかね。そのゴール像はだいたい頭の中にあるので、それを教えるってことは一切自分自身の姿勢としてはなくて、同じように問う。その問うことで本当、対話をして、そのことを周りの人も聴いているから。その聴いていることでその深みっていうのを増していきたいし、その単元的设计の中で最後に大きな問いがあるので、そこにつながるように問うたり、あとはカードも毎日提出してきて、振り返りも提出してきて。そこに関しても基本的には認めるか問うっていうことで、そこで学習が子供自身もつながっていくようになっていうところをコーディネートしようと思って関わってました。「こうやったら？」っていう言葉は一切言わないし、だけど、その中で問うことでそこがつながっていくようになっていうことを単元の狙いの方に行けるように、個別の支援っていうところが見取りと支援っていうのはとてもここは欠かせないところだなというふうに思うので、そこをやっていきました。

仁王小 菅原先生 (以下、菅) : 私はさっきおっしゃっているように問うっていうのは当然あるかなと思うんですけど、あとはどうしてもまとめ方であったり、資料の収集のところがどうしてもなかなかスキルとしてアップしていない。これはコーチングじゃないですけど、「こうしてみるといいよ」とっていうのは、私は指導をしながら押し付けにならない程度に、とか、あと友達を紹介するとかっていうのはよくやっています。

千 : それいいですね。

菅 : 「同じ問いの子がいるよ」とかって言って「行ってみたら」とかって言って、つないであげると結構進んでいくことが多かったな。それこそ和美先生のおっしゃったように、ゴールに向かう自分の中の青写真に会うようになって言ったらちょっとあれですけど、つなぎながら、構想を練りながら渡り歩くみたいなことをやっていますね。

村松先生 (以下、村) : 巡視の時にも子供たちにあんまりガツと喋るといのが可能な限り減らしていったところで、解き方を教えるというよりは、解決するための手立てを教えるという表現を使えばよろしいでしょうか。

今までに学習してきたことの「これ使えんじゃないの?」といったような形で問いかけをして、できるだけ解き方というよりは、その解決方法のヒントになるもの。実際、ちょっとヒントカードっていうのも作ってみたりなんかして取り組んでみたんですけど、そういう形で。あと少しでもできたら「いいね」と認めるっていうことを意識しながら進めていったっていう、そういう関わり方をしていたっていう感じででしょうか。

「教科による特性は?」

和 : 難しいですって。やってる教科がまず違うっていうところから。さっき子供にも聞いていたけれども、社会科ってやっぱり広いんですよね。ゴールがやっぱり広くて、子供たちがさっき喋ってたのが狙いにはいつてるんですよね。かなりこう抽象度がなくて、だけど具体は別でもあってもいいのが社会科なので。そうすると理科もある程度の狙いのゴールがあって、ましてや算数は特にそうだと思うので、その中で教科としての特性があるので、自由進度って一概に言っても教

科によってやっぱり違ってくるところがあるのかなというふうに思って今聞いていて。

あとは中学校は受験もあるしっていうところもあるんだろうなというふうに思って聞いていました。

千 : 数学悩みますもんね。

清 : 一番難しい。

千 : 受験抜きならやりやすそう。

和 : 数学が一番自由進度難しいんじゃないかなって。

清 : 私は。相性はあると思います。数学の中でも、さっきタイトルの意味を問うみたいな話があったと思うんですけど、中学校には確率ってあるんですけど、あそこは結構いいと思う。その「確率ってなあに?」って、そのタイトルの意味を言えない子たちって多分いっぱいいると思うんですよ。

単元の、学習の枠としてね。でも、おっきな柱があって、そこに向かっていくっていうことをやっていけばいいんですけど。ただ、今回、平面図形やったんですけど、なんかやっぱり他の教科と違うだろうなって思うのは、問いの答えを最初に全部配っているんですよ。もう自分たちで勝手に丸付けしてみたいな感じでやっているんだけど、問いを解いていくときに教科書の利用が必要になってくるんですよ。やっぱり載っている必要性がある分、載せている必要性が。だからそれを読み取ろうとしたときに、「え、これどういうこと?」みたいな。だからその用語の解釈とか、例えば回転だったら百二十度って、「これ百二十度ってどこからどの線見ればいいのか?」とか、何かそういうのをどっかかっていうところ広げていくっていうよりは、あるものをどう解釈していくかっていうことが今回やっていた多かったですね。

それが他の教科では違うのかななんて思いますね。



和 : 難しい、難しい。なんか思考に特化、数学の場合、思考に特化していくことはいいだろうなという気がするし、あとは発展的なところを自由進度でやっていく

っていいだろうなというふうには思うんですが、そこまでのところを自由進度で回していくっていうのがなかなか、なかなか難しい。

村：なかなか難しい。実は私関数で取り組んでみたんですけども。なかなかやっぱり関数のいわゆる知識のグラフはこういうのなんだから、その場面でも自由進度ってなると実はかなり厳しくて。

その応用、例えばジェットコースターの問題だとか、そういったところまで行くと、少しやりやすいなというふうに感じながら進めていました。本来であれば確かに図形とは相性がいいのかなって考えています。

例えば、あの簡単に平行線と角といったところ。色々広げやすいところがありまして、「ちょっとずらしたらどうなんだろう」「こうしたらどうなるんだろう」「じゃあちょっとさらに変更して三角定規の重ねてみたいな、ここ何度だろう？」ってどんどんどんどん広がっていった。でも結論からすると、使う概念は三角形の外角はそれと隣り合う二つの内角に等しい。実はたどり着くってというような場面も、今回の実践の中ではないですけども、以前そういった実践した時にそういう場面もあったんで、やっぱり数学については確かに図形だとか確率といったそのデータの収集に関わる部分についてはかなりやりやすいのかなというふうに感じました。

ただ、先ほどおっしゃいましたけど、その応用の部分、どうしても数学の単元構成は前半にそういった知識技能をして、後半にいわゆる何なりの利用ということでこういう問題を組み立てる。そこで場面分けして、ここは自由進度、ここは通常全体指導という形で混ぜて、ハイブリッドな形で進めていくといいのかなと思いました。

和：いろんな実践がありますよね。緒川小とかは、数学とか英語とかも完全に全ての単元を全部、単元計画や計画表に出して、全てを自由進度で回していくっていう学校の挑戦もあるし。だから、どこをどのぐらい幅を広げて挑戦していくのかっていう、で、子供はそれができる力はもしかしたらあるのかもしれないなっていうところで、今後いろんな挑戦が数学もできるんだろうなというふうには思っていましたし、あとは今回、次の学習指導要領で中学校の受験が変わりそうなので、そうなってくるとまたやれることも増えるのかなとい

う気はしますね。

千：自分はその教科によってやりづらさが違うっていうのはないのかなと。教科のしきたりとか、こうでなくてはならない、これは絶対外せないっていうのが多いのが、やりにくいとされる教科なんじゃないかな。ちょっと幅があってもいいんじゃないかなって思う人は、というか、教科は自由にできるっていうふうに分たちは捉えているのかなと思うんですけど。

でもそれを言ったら、完全に自由進度学習で全ての教科をやるのはできなくなるので、どうしてもここだけは押さえておきたいっていう時、ものがあつた時に、どの教科であってもどうやったら子供たちがそこに気づいて、「こうしなければならないものなんだ」っていうふうに気づいて、こっちが「そうだよ」っていう風に認める、声かけてあげられるかっていうのを考えた方が、この教科はどうだっていう風に考えるんじゃないかと、どうしてもここだけは絶対その通りに書いてほしいとか、っていうのを習得させるための方法を考えるのがいいんじゃないかなって思います。

その示し方として、「ここは気づいてね」っていうふうにまあ言ってしまうのが簡単なんですけど。それだとあまり自由度がないから、なんかこう罫を仕掛けておいて、でも絶対通らなきゃいけないところに罫を仕掛けて、そこに子供たちが全員もれなくはまってくれたりとか、そういうふうなのに誘い出すような感じで組み立てるのができるといいなと思っています。

ふわつとしてすみません。そういうイメージだから、どの教科であってもできるんじゃないかなっていうのを。難しいっていうか、工夫を- そうですね。-工夫しながら。

和：子供はできるんでしょうね、教師が思っている以上に。あとは数学算数に関しても、知識技能をいつまで授業でやるのかっていうところも今後出てくるのかな。ICT活用して。もうそこは授業っていう授業はもう思考に特化してやっていくっていうことも、ICTが習熟をもうどんどんどんどんやっていて、それはもう別物として思考に特化していくっていうことも算数数学ができるんじゃないかなというふうにはちょっと思っているんですよ。

AIドリルがうまく使えるといけるんじゃないかなという気がしますね。

「教科書を読み解く」

菅：さっきおっしゃったように、やっぱり自由進度っていろいろやってるんですけど、やっぱり校種違って教科が違っていると正直イメージが持てない。「数学の自由って何よ？」みたいなところからなんですけど。

そうですね。教科書、シンプルに教科書って使うんですか？

清：教科書を使います。

千：教科書を、教科書を使います。めちゃくちゃ使います。

菅：ネットも使う？

清：ネットを禁止は、もちろん禁止はしてないんで、使えとも言っていないんですけど、どっちかっていうと数学はネットで広げる幅があまりないんです。決まっているから。書いてあることをその通りだから。だから子供たちは一生懸命教科書読むんですよ。

進行（以下、進）：教科書読めなかったね。子供が教科書の意味がわからない。それをグループで「これってどういうことだろう？」っていうのを読み解いているの。で、「あ、そっか」って言い出すんだよね。

菅：そうか、教科書を読んで終わりとかじゃなくて、そもそも教科書を読み解くのが大変っていう。あ、そういう感じなんですね。

清：やっぱり数学ってイメージ的に知識を獲得してから、あの思考をはる表現みたいなイメージがあると思うんですけど、やっぱりどっちかっていうと、思考判断表現の問題を解けるようにするために、この知識が必要なんだなって。逆だと思うんですよ。今回とても思ったのは、さっきも喋っている気がするんですけど、問題を解いていた時に、「あれ、これって説明するときには何が必要なんだっけ？」知識の方に戻っていくんですよ。最初知識読んでから思考力が出るっていう。だから、そういう獲得の仕方もあるっていう学び方を知っているのは、今回その数学の授業やっていた時に、こういうことなんだっていうのが、なんか見て聞いて感じましたね。

あとはそのつまずきみたいところから、子供たちの議論がどんどん膨らんでいて。自由進度って言ったらいいか、学び合って言ったらいいかわからないですけど、それはなんかまあ一斉指導でできないわけじゃないけど、でも自由進度って起きやすい

し、そこで先生が入っていくじゃなくて、入ることもあるんですけど、でも子供たち同士でなんとか、なんとかこう試行錯誤しながら解決していくっていう姿がなんか素敵だなと思ったんですね。

和：絶対先生が教えるより残って使えますよね。うん。

進：全国学調の数学で素数の問題が32%です。1は素数じゃないけど、1を入れちゃうんだよね。でも、教師は教えてないわけじゃない。何回も言われてるからみんな教えてんだけど、子供が聞いてない、聞いてないっていうか、子供たちにストンと落ちていない。ああいうふうに「教科書これ何書いてるかわかんないよね。」って言って、周りと一緒に考えたりしたことは多分自分の中に落ちていくのかなって思うと、そういうことをしないとダメなのかなって思っています。

清：最初時間かかりますけど、ものすごい時間かかって。教科書1ページに1時間みたいな終わらないぞみたいな感じだったんですよ。でもそれも必要だなって。

千：大事だと思います。教科書読むのも。大事だと思います。

進：だから、和美先生がやってくれたように3回やると、多分その時間がだんだん短くなるわけですよ。

「発展的に学ぶ子がいてもいい」

和：なんかあれですよ。算数においても、数学においても、1ページを1時間でやる子がいてもいいし、2ページを1時間でやる子がいてもいいし、単元をバツとやって発展的に学んでいる子がいてもいいだろうし、その教科の進度っていうものを、うんと、揃えるか揃えないかによっても自由進度の幅っていうものが違ってくるんだろうな。

で、終わった子がもしかしたらつまずいている子のところに行けるかもしれないし。そこをどう考えていっていかっていうのもポイントなんだろうな。

村：実際ほぼそうになってました。早い子はとてつもなく進んで、進んじゃダメという指導もしてないです。あと、この日の最後にこういう評価問題、まあ「ラスト問」という呼ぶことにしたんですけども、をやるからね。それは事前に通知して。でも進まなくてもどんどん進んで構わない。どんなものでやってくる。でも終わった子は、わからない子は聞きに来たら教える。

だから教えるっていうのは一番最高の勉強法の一つか

なと思っていました。どんどんそういうのはOKって
いうことで、なのでどんどん進む子はどんどん進んで
構わないかなと思っています。本当に信じられないほど
早い子はまるまる確かに単元ほぼ終わって。

なのでじゃあその子にどんな課題を与えるかっていう。
与える方が先生になって教えるかっていう、本当にいい
感じで。今までちょっと出てきているっていうのはいい
のかなってちょっと本当に思いました。今もそんな
状況になっています。

普通に授業、今は普通の授業に戻したんですけども、
その時に自由進度の時のエッセンスがなんか残ってしま
って、いまだにとんでもなく教え、学べる気に、さ
っきもお話ししましたけども、出てきましたので。

和：そうですね、教えるってことは説明するってこと
ですよ。



清：そう思います。この下を救って、上を伸ばしてい
こうと。岩手県の場合、上を伸ばすと話してるじゃな
いですか。それ方法あるなって思ったのは、二次方程
式、あの、解の公式とか平方完成とかいろんな3つぐ
らい解き方あるんですけど、それが早く終わった子は、
まだやったことないですけど、高校の教科書を準備し
ておいて、たすきがけてここでやるんですよ。

あの内容って中学校の範囲がつながってるし、高校の
たすけ書きを知っておくと中学校の範囲がより分かり
やすくなるみたいな。もう少しそういう中学校って
いう枠組みに収まるんじゃないかと、高校とかその先ま
で見せる、見せられるような材料は用意しておく。

まあ、要るかどうかは子供たちが決めるんですけど、
そういうのもいいよなって思ったりするんです。もう
一つは、じゃあ中学校の教科書だけでダメなのかって
言ったらそうじゃなくて、中学校の教科書もいろいろ
発展してくんですよ。

例えば、二つの正三角形が大小の正三角形があつて、
線の進んだところに長さが等しいみたいな話があるん

ですけど、でも正三角形じゃなくて正方形でもいいよ
なとか、五角形でもいいよなとか、そういういろんな
ちょっと条件を変えた時に「どうやってやっていくん
だろう」、「どうなっていくんだろう」みたいな話で、
理想は子供たちが自走して、「こういうのもやってみ
たんです」って言えたら素敵だなと思うんですよ。

ただ、それをやるためにはやっぱり一斉指導に戻ると
思うんですよ。一斉指導でどれだけ普段から探究とか
発展の芽を子供たちに育てているかなと思うんですよ。
育ててって、ちょっと子供たちの中に落ちてれば全員
はやれないかもしれないけど、ある子が「でもこれっ
てこう変えたら？」って言った瞬間に学びが広がって、
教科書を越えた学びになっていくんじゃないかなと思
うんですよ。そうやっていくと、じゃあ授業中ちょっ
と間に合わなかったから、あの、さっき家庭でもって
いう話があったと思うんですけど、「家庭学習で、ちょ
っと正方形でやっていました」とか、「五角形でやって
いました」とかってやっていくと、すごい素敵なこと
だなって思うんですよ。

今の範囲を広げていくのと、先を見せてあげると、
両方の方向性もあってもいいよなって思う。他の教科
でもあるのかもしれないですね。なんか思いました。

和：私、社会科の他に生活総合も専門なので、やっぱ
り生活総合で探究ができるかできないかっていうこと
が大きい。先生たちの探究感覚もそうだし、子供の探
究感覚もそうだけでも、その生活総合での探究ができ
るかできないかっていうのは、結構自由進度に大きな
影響があるかなと。

私が入った学級の担任の先生も、生活総合をやってき
た人なので、その探究感覚っていうものが結構大事な
んじゃないかなという気がするんですよ。

○先生方にメッセージをおねがいします。

仁王小 菅原先生：やってみようということで、ぜひ
やってみてほしいなというような正直なところでは
おそらく子供も先生も最初は失敗するなって思います。
そこで、先生もやっぱりこう改善点が出てきたものを
次に生かせばいいし、子供たちも学び方どんどん
どんこう自分たちであのアップデートしていくので、
恐れずにやってみてほしいなっていうのが一番のメッ
セージです。レッツチャレンジだと思います。

向中野小 和美先生：おそらく、ほとんど先生たちって教えないとできないと思っているのが、教師の傾向は強いのかなというふうに思っているし、子供も教えてもらわないと不安なのが子供なんじゃないかなと思うんですが、そこを乗り越えてやっていくってことが大事なんじゃないかなと思います。子供が自分自身でできるようになっていくのが自由進度学習だなと思っているので、ぜひ個のとことんの学びをやっていって、それが個別最適な学びだと思いますし、その個のとことんの学びがあるから、共同的な学びができると思うので、そういうふうな自由進度学習に取り組んでいく価値はあるんじゃないかなと思います。

下橋中 千田先生：とりあえずやってみるっていうことが大事なのかなと思います。やっていく中で、子供たちも「自分は学ぶ人なんだ」という責任を感じるようになるのかなと思います。一斉指導だけだと黙って話を聞いていれば済むので、そうならないで自分で学ばなきゃいけないんだなと感じてもらおうと、そういうふうな子供たちが多くなる方が、先生にとってもいいんじゃないかなというふうに思って、とりあえずやってみてもらえるといいのかなと思います。

下橋中 清水先生：他の先生とも重複するんですけど、まずやってみることかなと。ただ、やるからには、何のためにやるかっていうことを外しちゃいけないのかなって思います。やっぱりどんな人に育てたいから、この自由進度学習をやってみるっていうことを外してしまうと、ただやってみただけ、全然学びが深まらなくて、「あー」というのじゃなくてだと思えます。

このやり方をやっていくと、一斉指導も少し変わると思うんですね。教師自身が自由進度学習で学んだことのエッセンスが一斉指導に生かされるところもあるし、逆に一斉指導に戻った時に、自由進度学習でもうちよつと工夫してみたらいいっていう、二つが相互に変わっていくと思うので、そういう意味でやってみるっていうことが大事なのかなとは思いました。

あとは単元でやる方法もあるんです、小単元でやる方法もあるし。あとは授業 50 分中でちょっと入れてみようっていう方法もあると思うので、すごいダイレクトにやっていいのかなって思いました。

城東中 村松先生：やはり重複してしまいますが、まずやってみないとわからないことが多かったので、まずとりあえずやってみていただきたいなというのが本音のところですか。実際、一斉授業だけだと、子供たちはどちらかというと受動的な立場になっていきます。でも、この自由進度学習の要素を取り入れることで、かなり子供たちも能動的に動いていくっていう場面が増えていくのかなというふうに考えました。そうすることで、やはり私として考えていたのは、あの、初めにもお話ししました「自らを律する自律」、「自ら立つのを自立」、この二つの姿、こういう姿になってほしいなという思いを教師が抱いた上で進めていくと、より子供たちが成長していくのではないかなと思います。そしてそのゴールの姿っていうのを具体的にやっぱり子供たちに語って、ぜひこの自由進度学習というのを挑戦してみてくださいと思います。



<参考文献>

- 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編 文部科学省 平成 29 年 7 月
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編 文部科学省 平成 29 年 7 月

文部科学省 中央教育審議会 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して

～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）2021年1月
内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループ

Society 5.0の実現に向けた 教育・人材育成に関する政策パッケージ＜中間まとめ＞2021年12月

文部科学省 中央教育審議会 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について
～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）

2022年12月

文部科学省 デジタル教科書推進ワーキンググループ 審議まとめ～学びの可能性を広げる教科書を～

2024年9月

小山 儀秋 「教科の一人学び「自由進度学習」の考え方進め方」 黎明書房 2022年

島谷 千春 「BE THE PLAYER 自治体丸ごと学びを変える、加賀市の挑戦」 教育開発研究所 2025年

研究担当者

協力校

盛岡市立仁王小学校
下橋中学校
向中野小学校
城東中学校

研究員

盛岡市立仁王小学校	教諭	菅原 斉
下橋中学校	教諭	千田 俊
	教諭	清水 貴之
向中野小学校	主幹教諭	和美 智教
城東中学校	教諭	村松 伴典

盛岡市教育委員会 主任指導主事 似内 流

盛岡市教育研究所 専門研究員 佐々木 秀一

研究紀要 692号

発行 令和8年1月
発行所 盛岡市教育研究所
〒020-8532
盛岡市津志田 14-37-2
TEL019-651-4111 (代)